

経済・金融 フラッシュ

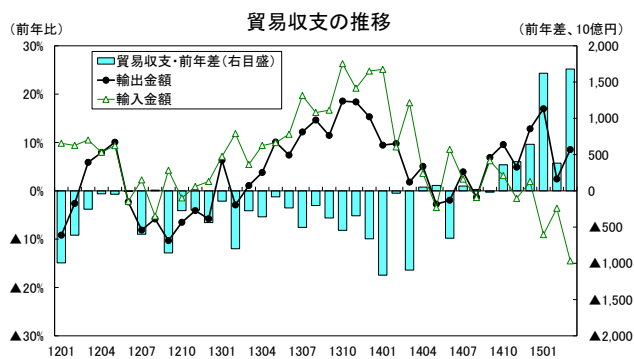
貿易統計 15年3月～貿易収支(季節調整値)は約4年ぶりの黒字も、1-3月期の外需寄与度はマイナスに

経済研究部 経済調査室長 斎藤 太郎

TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

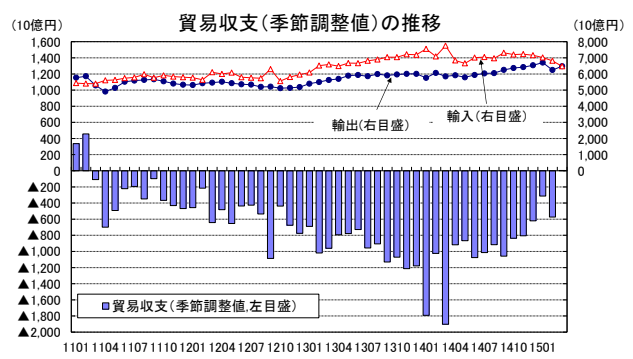
1. 貿易収支(季節調整値)は東日本大震災以降では初の黒字に

財務省が4月22日に公表した貿易統計によると、15年3月の貿易収支は2,293億円の黒字となり、黒字幅は市場予想(QUICK集計:479億円、当社予想は346億円)を上回った。輸出が前年比8.5%(2月:同2.5%)と前月から伸びを大きく高める一方、輸入の減少幅が2月の前年比▲3.6%から同▲14.5%へと拡大したため、貿易収支は前年に比べ16,794億円の大幅改善となった。輸出の内訳を数量、価格に分けてみると、輸出数量が前年比3.3%(2月:同▲2.1%)、輸出価格が前年比5.1%(2月:同4.7%)、輸入の内訳は、輸入数量が前年比▲10.3%(2月:同4.5%)、輸入価格が前年比▲4.6%(2月:同▲7.7%)であった。なお、輸入数量の急減は1年前の水準が消費税率引き上げや環境税増税前の駆け込み需要で押し上げられていた反動によるところも大きく、実勢として大きく落ち込んでいるわけではない。



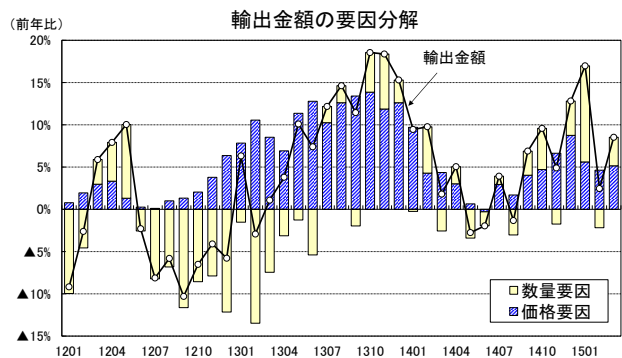
(資料)財務省「貿易統計」

(年・月)



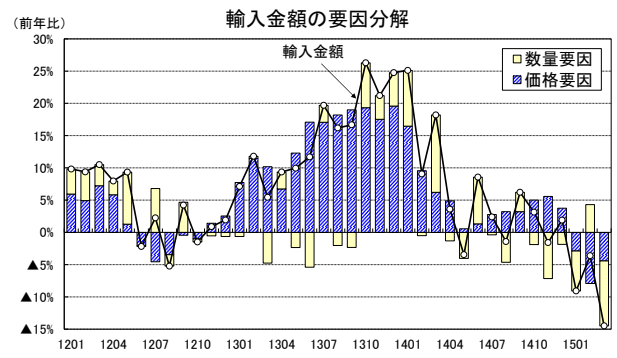
(資料)財務省「貿易統計」

(年・月)



(資料)財務省「貿易統計」

(年・月)



(資料)財務省「貿易統計」

(年・月)

季節調整済の貿易収支は33億円（2月は▲5,732億円の赤字）と小幅ながら4年1ヵ月ぶりの黒字となった。輸出が前月比3.7%（2月：同▲6.9%）と2ヵ月ぶりに増加する一方、輸入が前月比▲5.0%（2月：同▲2.9%）と4ヵ月連続で減少した。

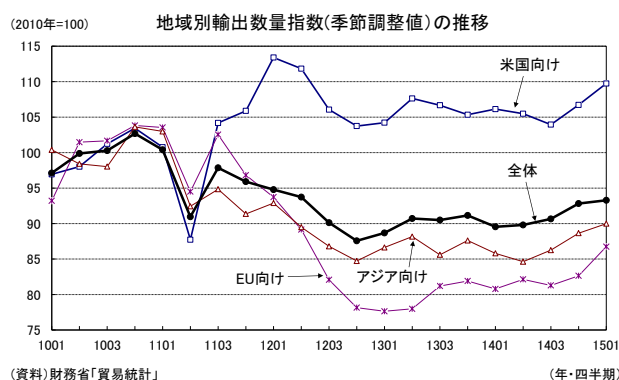
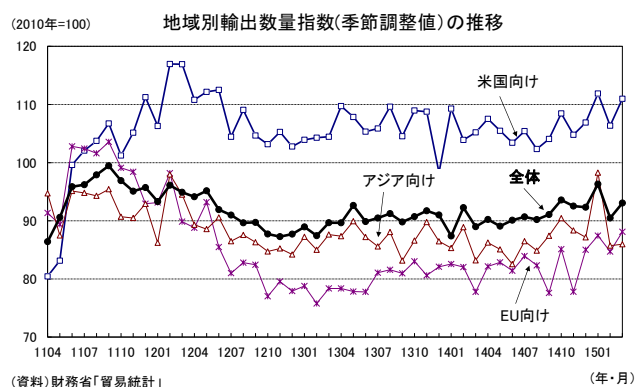
貿易収支には季節性があるため、実勢を判断するためには季節調整値を用いることが適切である。原数値の貿易収支は2年9ヵ月ぶりの黒字だが、季節調整値では東日本大震災発生直前の11年2月以来の黒字となる。実態としては東日本大震災以降、初の貿易黒字とみることができる。

2. 輸出入ともに回復

3月の輸出数量指数を地域別に見ると、米国向けが前年比5.9%（2月：同1.9%）、EU向けが前年比13.7%（2月：同3.3%）、アジア向けが前年比3.3%（2月：同▲3.4%）となった。

1-3月期の輸出数量指数を季節調整値(当研究所による試算値)で見ると、米国向けが前期比2.8%（10-12月期：同2.7%）、EU向けが前期比5.0%（10-12月期：同1.7%）、アジア向けが前期比1.5%（10-12月期：同2.8%）、全体では前期比0.5%（10-12月期：同2.4%）となった。

海外経済の回復ペースは緩やかにとどまっているが、円安の効果がようやく顕在化し始めたことにより輸出は回復の動きが続いている。



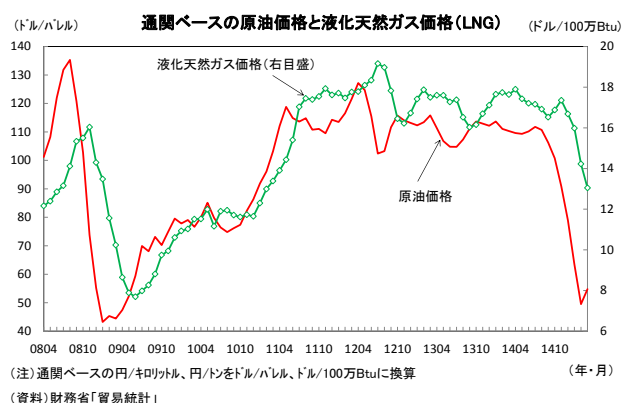
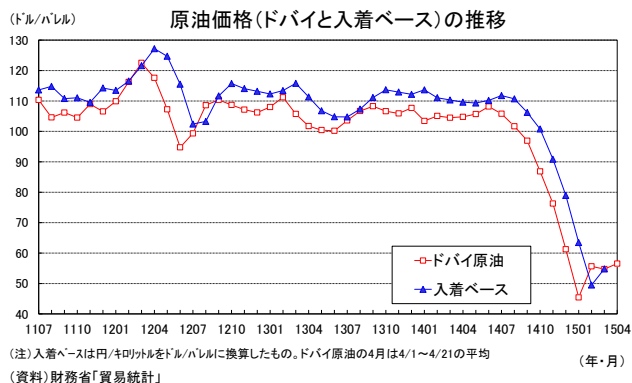
一方、1-3月期の輸入数量指数（当研究所による季節調整値）は前期比2.0%（10-12月期：同▲1.5%）と2四半期ぶりに上昇した。輸入は消費税引き上げ後の国内景気の悪化から弱めの動きが続いてきたが、国内需要の持ち直しを反映し、ここに来て回復の動きが明確となりつつある。

3. 貿易黒字の定着には至らず

3月の通関（入着）ベースの原油価格は1バレル=54.8ドル（当研究所による試算値）となり、2月の49.5ドルから上昇した。ドバイ原油は、3月は50ドル台半ばで2月とほぼ変わらなかったが、4月に入り60ドル台まで上昇している。このため、通関ベースの原油価格は、4月は3月からほぼ横這いとなるが、5月以降は上昇に転じる可能性が高い。一方、調達価格が原油価格連動型の長期契約となっている液化天然ガス（LNG）の輸入価格は、既往の原油価格下落の影響が反映されることによりしばらく低下するが、夏場以降は上昇に向かうだろう。

輸出数量はここに来て持ち直しているが、海外経済の回復が緩やかにとどまっていることから伸びを大きく高めることは期待しにくい。一方、輸入数量は個人消費を中心とした国内需要の回復を受けて15年度入り後には増加ペースが高まることが見込まれる。貿易収支（季節調整値）は当面、

ゼロ近傍で一進一退の動きが続いた後、夏場以降は再び赤字基調になると予想する。



4. 1-3 月期の外需寄与度は 4 四半期ぶりのマイナスに

3 月までの貿易統計と 2 月までの国際収支統計の結果を踏まえて、15 年 1-3 月期の実質 GDP ベースの財貨・サービスの輸出入を試算すると、輸出が前期比 1% 台半ばの増加、輸入が前期比 2% 台後半の増加となることが見込まれる。この結果、1-3 月期の外需寄与度は前期比▲0.1% (年率▲0.5%程度) と 4 四半期ぶりのマイナスとなることが予想される。

当研究所では鉱工業生産、家計調査、建築着工統計等の結果を受けて、5/1 の weekly エコノミストレーターで 15 年 1-3 月期の実質 GDP 成長率の予測を公表する予定である。現時点では、設備投資が増加に転じることなどから国内需要の伸びが高まる一方、外需が成長率の押し下げ要因となるため、実質 GDP 成長率は前期比年率 1% 台半ばと 14 年 10-12 月期の同 1.5% とほぼ同じ伸びと予想している。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。